

## グループインタビューの実施結果

## 1 実施概要

目的	こども計画策定のための基礎調査として、本市のこども・若者・子育ての実態や課題等を把握し、施策等を検討することを目的とする
日時	令和7年2月26日（水） 13:00～14:50
場所	久留米市役所本庁舎 15 階会議室
実施方法	本市のこども・若者・子育て支援に関わる関係団体を対象としたグループインタビュー（意見交換）
参加団体 （8団体）	ホームステイ・ホームビジット実施団体、こどもの居場所実施団体、こども食堂実施団体、フードドライブ実施団体、フリースクール実施団体、障害児支援団体、子育て当事者の居場所実施団体

## 2 主な意見

関係団体が発言された主な内容を掲載しています。

居場所
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育てサロンの補助金について、参加するこどもの人数に応じた金額へと見直してほしい</li> <li>・保護者が学校に言いにくいような、誰に相談したら良いか分からない相談をできる場所があると良いと思う</li> </ul>

貧困・経済的支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・フードバンクから食料品をもらっているが、既に登録している障害者関係施設や社協、その他市民ボランティア団体等で分けており、新たな団体が登録する余裕はない</li> <li>・3年前と比べて、配布を希望する世帯が多く、新規での受付は停止、フードバンクからもらえる量も減っているため、本当に困窮している世帯に絞って対応している</li> <li>・こども家庭庁事業に採択され、1ヶ月150人分を5回実施する予定だったが、希望者が想定より多く、160人となり、困窮世帯の多さを実感した</li> <li>・世帯による経済状況の格差が激しく、自費負担のイベントに不参加の家庭もある</li> </ul>

### 不登校

- ・フリースクールに通う経緯として、保護者の子どもに対する関心が高い家庭、子ども自身が希望する家庭、保護者が子どもに関わることを避ける家庭等がある
- ・フリースクールに通うには金銭的なハードルがあるため、お金のない家庭は家に引きこもることになると思われる
- ・オンラインゲームが原因で生活リズムが乱れて、学校に通えていない子どもが多い
- ・学校の先生には対応する余裕がなく、人手不足を感じる
- ・不登校のリスクが広がっている中で、フリースクールに行くお金のない世帯では引きこもることになってしまうため、中学校での校内教育支援教室のようなものが小学校でも推進されるべきだと考える
- ・子ども自身に合ったところを選択できるように、傾向の違うフリースクールが多くあることが望ましいと感じる
- ・不登校のこどものほとんどは勉強に苦手意識があるが、その子どもが勇気を振り絞って登校しても、勉強の遅れを取り戻すための体制が学校にはなく、教師の裁量による
- ・学校でできるサポートにも限界があり、家庭でも学力の底上げが困難な中で、どのようにして授業についていってもらえるようにするかが課題

### 障害児支援

- ・発達が気になる子どもが増えたことで、対応できる先生が足りていないことが気になる
- ・幼児研究所につながっても、対応してもらえるのが半年以上先となることもあり、子どもにとっては長すぎる
- ・幼稚園等の先生が保護者に発達が気になると伝えても、無視する保護者が助言を聞かないまま子どもが小学校に入ること、学級崩壊等の問題に発展することがある
- ・久留米市は5歳児健診がないため、発達のスクリーニングとしても導入する意義がある
- ・特別支援学校でも先生不足が課題と感じる
- ・不登校で学校に行けていない子どもについて、保護者が日中働いている場合は、朝から放課後等デイサービスを利用することもあり、そのようなケースが増えている
- ・聴覚過敏によって不登校に陥る子どももいる
- ・長期休暇明けに学校に行けなくなる子どもも多い
- ・学校の先生の計らいで、保護者と一緒に登校し、先生からシールをもらったら帰っても良いという方法で登校に慣れていけるようにしたことがある

### 親子関係・虐待

- ・ネグレクトや暴力で家に帰りたくないというこどもがいても、児童相談所の保護所のキャパシティが足りていない。行政にショートステイを実施してもらいたい
- ・国際交流のホストファミリーの経験から、寝食をともにすることで関係性を築くことが大事だと考えている。家庭人としてのいろはを教えることで、規則正しい生活を送り、学校にも通うようになる
- ・家庭で宿題ができていないと思われるこどもに対する学習支援を実施する中で、対象のこどもは学習面に大きな問題はなく、大人に隣に座りながら見てほしい、話を聞いてほしいという傾向が強く、家庭での保護者との関わりが少ないことが要因だと感じる

### 地域づくり

- ・こどもに様々な人生や人との関わり方があることを見せたいと考える上で、地域の交流が閉ざされていることが課題となる
- ・個人や個別の団体として活動している人が多いと感じている。地域全体がネットワークとして機能し、協力し合える地域づくりが重要と考える
- ・地域で支援活動をしている人の高齢化が進んでいる

### 関係機関の連携

- ・福祉と教育は両輪で進めるべき
- ・小学校における支援員不足や、福祉の目線では課題のある子どもでも学校側がそこを重要視しない等、意見の違いもあるため、福祉と教育の連携が重要

### 情報提供

- ・市が作成している子育て支援に関する団体のリストの冊子を学校経由で保護者に配布したら良いと思う
- ・フリースクール等の支援を学校の先生が保護者に個別に伝えている等、支援に関する情報が十分に開かれていないため、必要な人に届くようにすべき
- ・放課後等デイサービス等の障害支援を知らない人も多く、小学校高学年から支援につながるこどももいる。早期発見し支援につなぐためにも、就学時に保護者にお知らせが入る等の定期的に情報が発信される仕組みづくりが重要

### スマホ・タブレット依存

- ・こどもにスマートフォンを持たせており、こどもがインターネットで出会った人とやり取りをしている
- ・インターネットの利用の低年齢化により、不登校のリスクが高まったり、犯罪等に巻き込まれないか心配になる
- ・こどものゲーム依存についてしっかり対策すべき
- ・コロナ禍で児童にタブレットを配布しているが、その取扱いは先生に丸投げされており、家庭で保護者が不適切な使い方をしていないか見守る余裕もない